

5-1					
主題	補水と排泄ケアの取り組みを通して生まれた職員の意識変化				
副題	情報の記録化により視野を広げ、支援を見直す				
キーワード 1	職員の意識変化	キーワード 2	情報の記録化	研究(実践)期間	15ヶ月

法人名・事業所名	社会福祉法人 園盛会 特別養護老人ホーム 多摩の里むさしの園				
発表者(職種)	竹内崇(介護副主任)、日野由江(介護職員)				
共同研究(実践)者	山口佑樹(介護主任)、高井茉優(介護職員)、黒崎千春(介護職員)、他				

電話	042-555-8151	FAX	042-555-8152
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	当施設は、平成 10 年に開設した定員 150 名の従来型に加え、同一建物に定員 18 名のユニット型地域密着型特養を併設しています。25 名単位のブロックケアと 9 名単位のユニットケアという、それぞれの特徴を生かしたケアを行っています。また、「その人らしさを大切に」の法人理念のもと、ご入居者の自立支援を行っています。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

当施設ではブロック毎に年間の行動目標を策定して取り組んでいる。担当するブロックでは入居者 20 名(他、経管栄養 5 名)の内、半分以上の入居者が 1 日の目標補水量である 1,000cc を摂取できておらず、また排尿量の不定期な増量によるパッドからの尿漏れが多く見られていた。このことを踏まえて 30 年度は、個々の入居者の排尿量や補水量を把握し、職員が体調管理の意識を高めることを目標として掲げ、情報を基に意見を出し合いながら原因を追究し、状況改善に向けた取り組みを開始した。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

これまでは補水に提供できる飲料の種類が少なかったが、ブロックで出来る範囲でのアレンジを行い、嗜好に合わせた飲料を提供することにより、入居者は補水の時間を楽しみ、補水量増加へと繋がるのではないかと考えた。また、排尿量と補水量の情報を管理して一人ひとりに合った細やかなケアを提供することを目標とし、更に職員の視野を広げ、意識が高められることを目的とした。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ① 排尿量と補水量の記録を取り日々の状態を意識したケアを目指す
 - ・ 入居者 25 名に対し排尿量(目安)を表す「少・中・多」の 3 段階のスケールを使用し、施設で使用している 24 時間の排泄チェック表に記録を行い、排尿の量や時間毎の変動の把握を図った。
 - ・ 食事チェック表に 1 日の補水量の記入欄を新たに加えて時間毎の記録を行い、補水量が少ない入居者の状態や嗜好の確認を行った。
- ② 喜んで飲んで頂けるお茶の考案と提供

・開始時、1 日の補水量が目標の 5 割以下の入居者が 12 名。補水のアレンジや美味しいお茶の入れ方を考案し、職員全員が共有できるようにレシピカードを作成して提供した。

③個人別管理表を作成して体調管理の必要性和対策を考える

・日毎更新される排泄チェック表の記録では前後の関係が把握しにくいとの問題が上がり、入居者毎の個人別管理表をブロックで新たに作成。補水量と排尿量、排便や臨時の下剤の適用などをカラーで表示し、各職員が変化や状態を読み取りやすくした。

・個人別管理表から時間や排尿量を基に、現在の排泄ケアが適切であるかを検討。調整の必要がある入居者には 3 日間の排尿量測定を行い、パッドや対応時間の見直しを行った。

④自然排便がない状況を不自然だと意識し、下剤に頼らない排泄ケアを目指す

・排尿量と補水量を比較し、補水不足の 12 名には共通して臨時の下剤が適用されていることに着目し、さらに下剤の適用が恒例化している 5 名の入居者を補水強化対応者として取り組む対象とした。

・補水強化対応者には事前に医務課と栄養課に相談し、水分バランスを考慮して個別の補水目標量を設定。まずは毎朝の起床時に最初の 1 杯を提供。また、吸収率向上の為に一度に多量ではなく「こまめに補水」、電解質溶液や梅昆布茶等を使用して「ナトリウムとカリウムを摂取」を意識し、同期間は排尿量測定も行った。

《4. 取り組みの結果》

個別に職員が意識して補水を提供する事により、補水不足であった 12 名中 9 名の摂取量が 7 割以上に改善された。排泄面では下剤が恒例化していた 5 名の補水強化対応者にはその適用頻度に変化が見られ、内 2 名は殆ど下剤に頼ることなく排便が見られるまでになった。また、他入居者も下剤については未服用が 3 名、緩和が 4 名、さらには失禁も減少し、意欲的に活動してきた職員の自信に繋がった。

《5. 考察、まとめ》

新たな情報から入居者個々の状態を詳しく知ることで、支援を見直すことができた。また、職員の視野が広がったことにより、下剤に頼らない排便を理想とする取り組みに発展した。それに加えて、限られた材料を使用してアレンジした飲料を提供し、入居者に感想を伺うことで自然と笑顔や会話の触れ合いが多くなったことも職員の意識変化に大きく影響したと思われる。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

高齢者と介護者のための 排泄ケアナビ (ユニチャーム)

<http://www.carenabi.jp/> (2018 年 7 月 20 日閲覧)

高齢者の 1 日の水分量 (東京都福祉保健局)

《8. 提案と発信》

個別ケアに向けて日常の支援で出来ることは何かを考え行動に移すことで、わずかな変化にも達成感が得られ支援のさらなるやりがいにも繋がることを実感できた。私達は年間目標の期間終了後もこの取り組みを続けており、現在はさらに夜間の安眠を損なわない排泄ケアに向けて研究を行っている。